

忘れ得ぬ生徒たち(3) ～高校卒業～

3学期は、これまでの1年間の総まとめの時期です。とりわけ卒業を迎える皆さんは、高校生活の集大成として充実した学校生活を送ってほしいと思います。今回は定時制高校の卒業式で、卒業生が「卒業生の言葉」として後輩に贈ってくれた文章を紹介したいと思います。

中学時代の彼は水泳の優秀な選手だった。県大会に出場し、非常に優れた成績を残していた。彼の元には、いくつかの水泳強豪校から誘いが来ていた。彼が選んだのは、ある地方の強豪校だった。もちろん通うことはできないので、親元を離れ全寮制での高校生活がスタートした。

毎日の厳しい練習に耐え、彼は1年生でインターハイ出場を果たした。しかし、問題行動を繰り返した彼は学校を去らなければいけなくなった。ちょうど1年生の学校生活が終わろうとしていた頃だった。

定時制高校の転入試験で彼の面接を行った。これからの定時制高校での希望を語るものの、彼の目つきからは高校生活がしっかり送れるとは思えなかった。また同じ事を繰り返して、定時制高校を去るのも時間の問題と思えた。

2年生に編入した彼は、さっそく4月のキャンプで問題を起こした。友人とのトラブルで、つかみ合いのケンカになりそうになった。自分を押さえられない彼は、その後もさまざまな場面でトラブルを起こした。全日制の生徒と殴り合いになりそうなこともあった。そのたびに、母親に学校に来てもらい話し合いを持った。また、定時制高校の授業内容がやさしすぎたのか、授業や周りの生徒を馬鹿にしているような態度が目立っていた。

昼間、働いている職場での経験が役に立ったのか、彼も少しずつ落ち着いてきていた。体育会系であった彼は、筋をきちんと通して説明すれば納得するようであった。

修学旅行で朝、部屋を見回りに行ったとき、彼の部屋はすでに布団がきちんと畳んで片づけてあった。全寮制での習慣が、今でも彼の体の中には残っているようだった。

3年生の時、彼に変化が起こった。プライベートな事柄であったが、彼はそれを機会に、別人のように大きく変わった。

私の定時制生活は3年間だった。それは定時制に入る前に、ある全寮制の学校に行っていたからだ。この学校にいた時は今じゃ考えられないほどの厳しい生活だった。私は体育コースの水泳部に入っていて、その練習量の多さ、また上下関係の厳しさをこの体にたたきつけられた。朝5時から泳いで、昼も泳いで、夜も泳いだ。風呂に入った後も筋トレをやり、まさに水泳に命をかけたような日々だった。夜寝るときも下級生だった私は先輩のマッサージをしなければいけないので、寝る時間なんかほとんどなかった。上下関係など知らなかった私はよく先輩にかわいがられた。

言葉の一つひとつにうるさい学校だった。その厳しさの中で限界を超え、何度も私は問題を起こした。そのたびに親に連絡が行き、新幹線を乗り継いでいつも謝りに来ていた。そのたびに親にあわす顔がなく、親には頭が上がらなかった。

今思うと、あの頃は何も考えずに生きていた気がする。そんな私が今じゃ結婚し、一人の娘の父親である。いろいろ苦労が絶えないけど、なんとかやってきている。今、父親の立場になり、いろいろ考えてみると、親というのは大変だなと感じたし、偉いとも思った。自分らもこのように育ててくれたんだと思うと、苦労かけてきたな、迷惑かけてきたなとつくづく思っている。

私は今、掃除屋の仕事をしている。朝早くから起きて働き、夜は学校に行く。その後、寝ずに夜中も働き、また朝働くという生活が続いている。何度もだるいとか、休みたいとか思うときがあるけれど、娘の事とかを考えると、働かなきゃいけない、学校も早く卒業しなきゃいけないという気持ちが出てきて、いくら疲れていて眠くても、仕事と学校には行っていた。

学校はタダじゃないし、お金がかかっている。最後に言いたいのは、少しは親の気持ちも考えてもらいたいということだ。高校というのは義務教育ではないし、行きたくない人は行かなくてもいい所だ。学校に行くにはお金もかかる。働いている人はわかるけど、お金をかせぐのはものすごく大変だし、そんなにはかせげない。「どうせ学費は親が払うからいいや」と思っている人は考え直して欲しい。遊びたいから学校を休むとか、学校に来てギャーギャー騒いでみんなに迷惑をかけるような人は考え直した方がいい。

学校という所は私たちが行くからあるのだし、親から言わせれば自分から進んで行かないのでは、一体何のための、誰のための学校なのかかわからないと思う。

こんな私でも卒業出来るのだから、誰でもできないわけではない。だから気合いを入れて頑張りたい。長々と偉そうな事を言ってきたけど、最後に今までありがとう。

